

# コミュニケーション能力養成の観点から見た日本語教科書のモデル会話 —中国の「総合日本語」教科書における相づちの扱いを中心に—

張 金 龍

## 要 約

本研究は、日本語コミュニケーション能力の養成という観点から、日本語の相づちに焦点を当て、中国の「総合日本語」の教科書のモデル会話において相づちがどのように扱われているかを分析し、そして、自然会話における相づちに関する研究成果を参考しながら、そこに存在している問題点を指摘し、その原因を考察するとともに今後の教科書作成、教師の教授に対する提案を行うものである。

## 【キーワード】

コミュニケーション能力 日本語教科書 モデル会話 相づち

## 1. 研究背景

中国の大学日本語専攻の教育において、「総合日本語」という科目は中核的な役割を果たしている。初級段階で、「総合日本語」教科書に載っているモデル会話は、学習者の会話能力や会話習慣の形成に著しい影響を与えている。現在市販されている教科書のモデル会話は、文法、語彙の導入や提示に集中するあまり、実際のコミュニケーションの中において不可欠な会話を円滑に進める能力、すなわち、会話の運営能力や自分の発話を調整する能力、感情を適切に表出する能力などの養成を視野に入れていないようである。

実際のコミュニケーションは実質的な情報を交換するのが中心的な目的である一方で、話者間の気持ちや理解の交流も欠けてはならないものである。相手の気持ちや理解を適切に把握した上で、コミュニケーションを進めるのが一般的で、同時に自分の感情や態度を適切に伝えないと、相手も不安になって、コミュニケーションがうまくいなくなる。

自分の感情・態度の表出が直接すぎて、相手に違和感を与えることもある。あるいは相手の発話を聞いているだけで、何の反応もせず、相手を不安にさせたりすることもよくある。この面で、日本語でのコミュニケーションを円滑に行う上では、相づちについて学ぶことが必要になってくる。また、会話の運営上、そして適切な自己表出の面でもそれらを学ぶことの意義はあるだろう。

本研究は、日本語コミュニケーション能力の養成という観点から、中国の「総合日本語」の教科書のモデル会話における相づちの扱いを把握し、教科書の改善を求めようとするものである。

## 2. 研究目的

①日本語コミュニケーション能力の養成という観点から、中国の「総合日本語」の教科書のモデル会話において相づちがどのように扱われているかを分析する。

②日本語の自然会話における相づちについての研究成果を参照しながら、そこに存在している問題点を指摘し、その原因を考察するとともに今後の教科書作成に対する提案を行う。

## 3. 本研究における相づち

### 3-1 相づちの定義

本研究では、小宮（1986）、メイナード（1993）、堀口（1997）及び楊（2001）を参考にして以下のように相づちを定義する。

相づちとは、話し手が発話権を行使している間に、または話し手の発話が終了した直後に、聞き手が自由意志に基づいて送られた、『聞いていますよ』『分かりますよ』というような信号を表す短い表現である。

この定義の中にある自由意志とは、話し手が積極的に応答を求めたもの（質問、呼びかけ、命令や要請の表現等）に対する答えではないことを意味する。また、聞き手の短い発話のうち、話し手が回答を要する聞き返しや情報の追加要求の表現は相づちとしない。

### 3-2 相づちの表現形式の分類

本研究では、小宮（1986）、楊（2001）及び大浜（2006）を参考して、本研究の研究目的に基づいて、以下のように相づちを分類している。

①ハイ系、②イエ系、③エ系、④ア系、⑤ウン、⑥オ系、⑦ヘー系、⑧ソウ系、⑨「繰り返し」、⑩「言

い換え」、⑪「先取り」、⑫「その他」、⑬「複合型」の13種類である。

### 3-3 相づちの機能分類

本研究では堀口（1997）、松田（1988）、郭（2000）を参考に、以下の六つを相づちの機能と考える。

①「聞いていることの表示」：相手の話を聞いていることを示すもの。②「情報の了解の表示」：相手が伝えた情報の了解を示すもの。③「同意の表示」：相手の話に同意・共感を表明するもの。④「否定の表示」：相手の話に否定・異論を表明するもの。⑤「感情の表出」：相手の話を聞いて感じた喜び、悲しみ、驚きなどを示すもの。⑥「間つなぎ」：次にどちらかが話し始めるまで、余韻のように続けられるもの。

## 4. 研究の方法

### 4-1 研究対象

本研究では、表1で示されるように、中国の「総合日本語」教科書6種類の第一、二冊（初級）を対象に、相づちの扱いに関する調査を行った。

表1 調査対象とした教科書

書名	調査範囲	出版年	出版社
『新編日語』	1-2冊	1993-1995	上海外語教育出版社
『新編基礎日語』	1-2冊	1994-1995	上海訳文出版社
『基礎日語教程』	1-2冊	1998-2001	外語教学与研究出版社
『新大学日本語』	1-2冊	2001-2003	大連理工大学出版社
『基礎日語教程』	1-2冊	2004-2006	旅遊教育出版社
『総合日語』	1-2冊	2004-2006	北京大学出版社

### 4-2 分析データの整備方法

まず、上述の6種類12冊の教科書のモデル会話に現れる相づちを、本研究における相づちの定義に基づいて抽出した。次に、相づちの各々について、言語形式、出現位置、機能の観点から分類を行い、分析用データを作成した。

### 4-3 分析方法

まず、教科書に提示されていた相づちを、それぞれ提示数、言語形式、出現位置、機能という四つの面によって、分析を行い、調査結果をまとめた。次に、自然会話の研究成果を参考しながら、教科書における相づちの扱いの問題点を指摘し、その原因を考察した。最後に、今後の教科書の作成に対して提言を行った。

## 5. 調査結果と考察

### 5-1 調査結果

調査対象とした6種類12冊の「総合日本語」教科書のモデル会話における相づちの提示について調査・分析した。調査結果をまとめてみれば、主に以下のようことが分かった。

- (1) 6種類の教科書には、相づちが548件提示されているが、各教科書の間の提示数のばらつきは大きい。
- (2) 6種類の教科書には、79種類の相づちの言語形式が提示されている。しかし、各言語形式の提示数が異なり、集中的にごく一部の言語形式を提示する傾向が認められる。また、教科書によって、提示される相づちの言語形式の種類に差がある。
- (3) 相手のターンの途中に現れる相づちと相手のターンの後に現れる相づちが両方とも提示されているが、日本語の中でよく見られる前者の提示率が教科書では後者の提示率よりずっと低い。また、日本語会話ではよく見られる文の途中に打たれる相づちが、どの教科書にもまったく提示されていない。
- (4) 「聞いていることの表示」と「間を持たせる」という機能の相づちが、どの教科書においても提示されていない。そして、全体的にも、各教科書においても、提示されている4つの機能のうち、「了解の表示」と「同意の表示」が集中的に提示され、「否定の表示」「感情の表出」の提示は限られている。

### 5-2 考察と提案

以下では調査結果から見られた問題点について考察を行い、改善策を試みた。

問題点1 相づちが少ないことで、会話がぎくしゃくしていること。これは教科書において、二種の表れがある。教科書には、単なる質問と答えの応酬のみから成っていて、発話と発話のつながりがぎくしゃくした感じの会話がよく見られること、教科書のモデル会話においては、相手のターンが終わらないうちに、聞き手が発話することはほとんどないことである。改善策として、質問、答え、質問、答えの例文羅列のような機械的な会話を減らし、話者間の意思疎通を考慮に入れながら、会話の展開を工夫すること、長い発話には、聞き手が適当なタイミングで相づちを打つように提示することが考えられる。

問題点2 特定の言語形式に提示が集中していること。勿論、教科書として、提示された言語形式は多ければよいというわけではないが、相づちの実際の使用状況と、学習者の需要を考慮に入れて、限られた言語

形式ばかりを繰り返し出すのではなく、提示する言語形式を多様化し、提示数のバランスをとる必要があるだろう。

問題3 相づちの出現位置が「相手のターンの後」「文の後」に偏り、「文の途中」という自然会話における出現状況を反映していないこと。

郭（2000）によれば、相手のターンの途中にはターンの後以上に相づちが現れると報告されている。そして、水谷（1984）、黒崎（1987）、今石（1992）、メイナード（1993）などでは、日本語では終助詞や間投詞、ポーズの後、区切られた語句の付近で相づちがよく見られると指摘されている。つまり、言い切りの文の後だけではなく、一つの文の中でも相づちがよく打たれているということである。

学習者の立場から見れば、日本語の会話の中で、いつ、どのようなところで相づちを打つべきか、そして会話の相手が相づちを打ってくれる可能性があるかは、実際のコミュニケーションのために重要な知識である。教科書の紙面や会話形式の束縛を突発し、学習者の需要から、「相手のターンの途中」、「文の途中」に相づちを入れたほうがよいではないかと思われる。

問題4 教科書における相づちの機能が一部のものに偏り、自然会話に現れる様々な機能が提示されていないこと。

郭（2000）は、10人の母語話者の会話の中の相づちを分析した結果、「聞いていることの表示」を表す相づちは全体の42%を占めていたと報告している。この結果からも、「聞いていることの表示」という機能を持つ相づちは、日本語母語話者の会話の中で少なからず現れるものと考えられることができるだろう。

しかし、調査結果では、「聞いていることの表示」という機能が提示されていなかった。その主たる原因は、教科書における相づちの出現位置にあると考えられる。以上の分析では、教科書においては「文の途中」に現れる相づちがまったくないという結果が得られた。その一方で、「聞いていることの表示」の機能を持つ相づちは必然的に「文の途中」に現れると考えられる。なぜなら、文が言い切られた場合、つまり一文が完了したところでは、相手から一つのまとまった情報が与えられたことになるので、そこで打たれた相づちは「聞いていることの表示」ではなく、必然的に「情報了解の表示」ということになる。すなわち、教科書では、モデル会話における相づちの出現位置はが提示される相づちの機能の種類に影響を与えていることになる。「聞いていることの表示」の機能を持つ相づちを提示するためには、相づちの出現位置をまず多様化

する必要があるだろう。

そして、「間を持たせる」は、発話の進行中、話者たちがお互いに相手の意図を測りながら、これから何を話したらいいか、どういう方向へ会話を進めたらいいかを調整・交渉する場合に、相づちで時間を稼ぐ、という機能である。このような状況は会話の中でよく見られ、このような相づちを学習者に教えることは重要だろう。すぐに自分で実際に使えるようにならなくても、日本語の会話で相づちのやり取りが続くような場合に何が起きているかを知ることが、実際のコミュニケーションに向けて役立つことではないか。

また、教科書に見られる「否定の表示」の相づちは、殆どが感謝や謝罪に対する応答として使用される儀礼的なもので、「否定の表示」の1種類にすぎない。相づちによって表される否定には相手の意見への異論や強い疑問の表明などもあり、またそれを直接的に表す場合もあれば、婉曲に表す場合もある。教科書においても、儀礼的なものだけでなく、様々な否定を表す相づちを学習者に提示することが望ましいだろう。

## 6. まとめ

以上で、教科書における相づちの扱いに存在している問題点を考察し、提案を試みたが、以上の問題は、二点にまとめることができるだろう。

第一に、教科書のモデル会話における相づちは、まだ文法項目を教えるために付随的に取り入れられているだけであり、コミュニケーションをより円滑にする要素として体系的に扱われているわけではない。これは以下の二点から指摘することができます。まず、教科書に提示されている相づちは、言語形式、出現位置、機能の種類が非常に偏っている。また、教科書では、相づちについての解説や説明が断片的に行われているだけで、対応練習が設けられていない。筆者の考えでは、相づちのような表現を話し言葉に欠かせない要素として位置づけ、その実際の使用状況を反映できるように提示し、対応する解説・練習も設け、体系的に扱うべきではないか。

第二に、教科書のモデル会話について、話し言葉としての形という点から再考する必要がある。教科書のモデル会話を見ると、発話文はまったく中断がなく、言い切りの完全な文でなければならない、一人の話者が言いたいことをすべて言い終わらないと相手が発話できない、というように見える。無論、教科書は教材としての要求や、紙面の制限などがあるが、実際のコミュニケーションを考えれば、このようなモデル会話は現実の会話からかなり離れている。学習者のコミュ

ニケーションの養成という観点からは、教科書のモデル会話のありようを検討し、自然の会話の姿に近づかせる必要があるだろう。

今回の調査対象には限りがあるが、そこに認められた問題点に対して試みた提案は、初級教科書の第1、2冊に限らず、学習段階を考慮に入れながら活用されることが望ましいと考える。

**主な引用文献：**

泉子・K・メイナード（1993）『会話分析』くろしお  
郭末任（2000）「自然会話に見られる相づち的表現」『日本

語教育』118号47-56

小宮千鶴子（1986）「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』第3号大東文化大学語学教育研究所43-62

松田陽子（1988）「対話の日本語教育学」『日本語学』7巻13号59-65

水谷信子（1984）「日本語教育と話しことば実態—相づちの分析—」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二巻 言語学編』三省堂 261-279

堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお

楊晶（2000）「相づちに関する意識の中日比較—アンケート調査の結果より—」『人間文化論叢』第3巻 御茶ノ水女子大学大学院人間文化研究科87-100

ちょう きんりゅう／北京日本学研究センター 日本言語・教育コース 修士3年  
Zhangjinlong915@yahoo.co.jp